

地理的探究力を育成する大学地理教育の授業開発の新視点 ～単元「びんご多国籍時代」の場合～

小原 友行
(人間文化学科)

本小論の目的は、大学における地理教育の授業を地理的探究力の育成をねらいとしたアクティブ・ラーニング型なものに改革するためにはどうすればよいか、その視点を明らかにすることである。具体的には、本研究においては、福山大学における共通教育科目として担当している授業科目「自然地理」「人文地理」「地誌」において、「地域創生」をテーマに新聞や博物館を活用した授業開発を試みる中で、3つの授業開発の視点(①目標としての地理的探究力、②内容としての近未来の地域的課題、③方法としてのNIEを取り入れたアクティブ・ラーニング)を抽出した。本小論では、これらの視点を取り入れた授業デザイン例として、「地誌」の科目で2017年度の中国新聞連載記事を取り入れて実践した単元「びんご多国籍時代」を紹介した。

【キーワード：地誌，地理的探究，NIE（教育に新聞を），アクティブ・ラーニング，多文化共生】

1 はじめに～本研究の目的と方法～

(1) 本研究の目的

本研究の目的は、「地理的探究力」の育成をねらいとした大学における地理教育の授業をアクティブ・ラーニング型に改革するための視点を明らかにすることである。具体的には、福山大学における共通教育科目として担当している授業科目「自然地理」「人文地理」「地誌」の授業において、「地域創生」をテーマに、新聞や博物館を活用した授業の開発・実践を試みることである。

2017年度の「自然地理」の授業科目については、前期の「自然地理(1)」では中国新聞の連載記事「海に聞く 瀬戸内再生」を取り上げた単元「瀬戸内再生」¹⁾を、後期の「自然地理(2)」では、福山大学海洋生物資源研究所の水族館を活用した単元「瀬戸内再生」を開発した。「人文地理」の授業科目については、前期の「人文地理(1)」では広島県立歴史博物館の主任学芸員による出前授業を取り入れた単元「歴史の中の地図」を、後期の「人文地理(2)」では広島県立歴史博物館を見学・調査する活動を取り入れた単元「瀬戸内の港町と地理」を開発した。また、後期の授業科目「地誌」では、中国新聞の連載記事「びんご多国籍時代」を取り入れた単元を開発した。

本稿では、これらの実践のうち、2017年度後期の授業科目「地誌」²⁾の中で開発した、中国新聞の連載記事を用いた単元「びんご多国籍時代」の場合について考察していきたい。

(2) 研究の手順と方法

前述の研究目的を実現するために、本研究においては、大きく次のような手順と方法で研究を進めていった。

- ① 大学地理教育の授業改革のための課題を、学習指導要領の改訂から抽出する。また、その課題を解決するための視点と方法を考え、単元の授業デザイン案を構想する。
- ② 地元の中国新聞社のN I E関係者や博物館の学芸員と連携を図り、新聞を活用した授業方法あるいは博物館を活用した授業の可能性について協働的に検討するとともに、教材となりうる連載記事・特集記事や博物館・水族館の展示内容を検討する。
- ③ 授業改革のための課題を解決する視点、単元の授業デザイン案、N I E関係者や学芸員との協働的検討内容などにに基づき、担当する授業科目の単元計画の作成を行う。
- ④ 単元計画に基づき、授業実践を行う。
- ⑤ 実施した授業実践の結果の分析に基づき、単元の授業デザイン案および授業計画の修正・改善を図る。

本稿では、このような研究目的・研究方法に基づいて行った研究の成果として、現時点で到達している「地理的探究力」を育成する大学教育における地理授業開発の新視点と、それに基づいて開発した単元「びんご多国籍時代」の授業計画、その成果と課題について紹介していきたい。

2 大学地理教育における授業改革のための課題

(1) 教育課程改訂に伴う大学地理教育の課題

大学における地理授業改革の課題の一つは、2020年度から小学校、2021年度から中学校、2022年度から高等学校において学年進行で全面实施される、新しい学習指導要領の目指す3つの改訂の方向性である。

その第1は、資質・能力を育成する学習開発である。換言すれば、「何ができるようになるか」を明確にした学習の開発である。今回の学習指導要領の改訂においては、目標である資質・能力の要素として、次の3つが示されている。

- A 「知識・技能」…「何を理解しているか、何ができるか」
- B 「思考力・判断力・表現力等」…「理解していること・できることをどう使うか」
- C 「学びに向かう力・人間性等」…「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」

これらの中では、新しい観点である「学びに向かう力・人間性等」を育てる授業開発が大きな課題になると考えられる。Aは「学んだ力」、Bは「学ぶ力」と考えると、Cの「学びに向かう力・人間性等」は「学ぼうとする力」であり、学校教育法の第30条第2項にある「主

体的に学習に取り組む態度」に相当する。ここでは、A～Cの資質・能力を、それぞれ「A型学力」（学力調査のA問題で測定）、「B型学力」（B問題で測定）、「C型学力」（C問題は未作成）をとらえると、今回の改訂で特に注目されるのは、3番目の「C型学力」である。それは、未来を創るために必要な実践力でもあろう。

第2は、近未来の社会的課題を取り入れた学習開発である。換言すれば、「何を学ぶか」を明確にした内容の見直しと、それに伴う新しい学習内容の開発が求められていることである。具体的には、新しい学習指導要領で学ぶ児童・生徒が社会人となり、一人前の大人として社会を支えるようになる近未来である、2030年の社会の変化に対応する学習内容の開発が必要となろう。なぜなら、このような近未来の社会的課題は、彼らが成人として、また主権者として活躍する時代にこそ判断や決断が迫られる課題になると考えられるからである。

第3は、「主体的・対話的で深い学び」の学習開発である。具体的には、「どのように学ぶか」を意識した学習の開発である。これまでの学習指導要領では、学習方法については教師の工夫に任されていたが、今回は「課題発見」「課題追究」「課題解決」という学習過程が教科を越えて示唆されており、そのための方法として、「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）が提案されている。

以上の3つの課題は、大学教育においても同様に重視される課題と考えられる。このような課題に応える授業を開発していくことが、これからの地理授業改革には必要となろう。

（2）高等学校における「地理総合」「地理探究」登場による大学地理教育の改革

もう一つの大学における地理授業改革の課題は、高等学校学習指導要領の地理科目の新設である。そこでは、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者」を育成するために、従前の「地理A」「地理B」に代わって、新必修科目として「地理総合」、選択科目として「地理探究」が登場することになっている。

「地理総合」は、主題を基に課題解決的な学習により、社会で生きて働く地理的実践力育成の場として、「地理探究」は、「地理総合」で習得した地理的な技能、見方・考え方を基に、世界の諸事象の規則性や傾向性などを系統的に、また世界の諸地域の構造や変容などを地誌的に考察した上で、現代日本に求められる国土像の在り方について構想することにより、高等教育での学びにも繋がる本格的な地理的探究の場として構成すると、「審議のまとめ」ではなっている³⁾。

なお、「地理総合」は、「(1)地図と地理情報システムの活用」「(2)国際理解と国際協力」「(3)防災と持続可能な社会の構築」から構成されている。また、「地理探究」は、「(1)現代世界の系統地理的考察」「(2)現代世界の地誌的考察」「(3)現代日本に求められる国土像」から構成されている。特に、「地理総合」の内容の(3)では、「生活圏の課題を、観察や調査・見学等を取り入れた授業を通じて捉え、持続可能な社会づくりのための改善、解決策を探究する」とな

っている。また、「地理探究」の内容(3)では、「…我が国が抱える地理的な諸課題を探究する活動を通して、その解決の方向性や将来の在るべき国土像や地域像について展望する」となっている。

このような高等学校での学びを踏まえた上での、大学での地理教育の授業デザインの改革が急がれることになる。

3. 大学における地理教育改革に向けた授業デザインの3視点

(1) 目標としての「地理的探究力」

大学における地理科目の授業改革の視点の第1は、目標の改革である。具体的には、「地理的な見方・考え方」⁴⁾をベースに、「地理的な思考力・判断力・表現力」「地理的問題解決力」「地理的実践力」などを統合した、「地理的探究力」を重視することが必要であろう。

「地理的探究力」とは、地理的な見方・考え方に基づいて、地理的事象や問題・課題を次の3つの問いで探究する力と定義することができよう。

- ① 「どのような、どのように」(「社会を知る」ための問い) …「資料から必要な情報を集めて読み取る」
- ② 「なぜ、どうして」(「社会がわかる」ための問い) …「事象の意味・意義を解釈する」「事象の特色や事象間の関連を説明する」
- ③ 「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」(「社会に生きる」「社会をつくる」ための問い)…「自分の考えを論述する」

①は、「社会を知る」ための問いであり、地理的事象や問題に対して「どのように、どのような」と問い、その過程や構造・特色について資料を活用して記述することを求めるものである。例えば、「地域の産業にはどのような特色があるか」「瀬戸内海的环境はどのように変化してきているのか」、という問いである。

②は「社会がわかる」ための問いであり、地理的事象や問題に対して「なぜ、どうして」と問い、推論によってその背景を思考するためのものである。例えば、「なぜ備後地域では多国籍化が急速に進んでいるのか」「明治初期に、なぜ広島湾沿岸部や太田川の中・下流域から移民が多く出たのか」「冷戦後の今でも、世界各地で民族紛争がなくなるのはどうしてか」、といった問いである。

そして③は、「社会に生きる」「社会をつくる」ための問いであり、特に地理的な問題や課題に対して「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」と問い、最も有効な問題解決策の決定や、目的・目標を実現するための最も合理的な手段・方法を選択・決定するために行う社会的な判断を求めるものである。例えば、「松永駅周辺を活性化するにはどうすればよいか」「瀬戸内を再生するにはどうすればよいか」「世界の民族紛争を解決するにはどう

すればよいか』『フクシマ』の復興を促進する理念・キーワードとして何が必要か。」「脱原発か、縮原発か、続原発か」、といった問いである。

地理教育が育成しようとする「地理的探究力」とは、地理的事象や問題に対する「どのように、どのような」「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」という問いに答えていく力ととらえることができる。それと同時に、それらの問いがつながって問題解決や実践に生かされることが重要であろう。換言すれば、知る・わかるだけでなく、その背景を熟考し、自分なりの意見や考えを持ち、それを表現しながらより良い社会の実現へ向けての参加・参画を考える力である。

(2) 内容としての近未来の社会的課題

授業改革の視点の第2は、学習内容の改革である。具体的には、新しい学習内容として、近未来の社会的課題の解決をテーマとして取り上げることが必要であろう。例えば、次のような課題である。

- ① グローバル化・多文化化への対応
- ② 持続可能な社会の形成
- ③ 産業や社会構造の変化に伴う新たな制度や価値の創造
- ④ 共助・自助の視点からの防災・安全対策
- ⑤ 主権者育成（社会貢献、政治参加など）
- ⑥ 地域創生（里山・里海再生など）

これら近未来の社会的課題を学習内容として構成していくことが、「地理的探究力」の育成にとっても必要となろう。なぜなら、これらは、近い将来、学生が主権者として、社会の形成者として、解決のための判断が求められる大きな社会的課題であると考えられるからである。また、このような課題に出会うことによって、「どのように、どのような」「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」という問いも生まれやすくなるからでもある。

(3) 方法としての「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）

授業改革の第3視点は、学習方法の改革である。具体的には、「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）を取り入れることである。なぜなら、「地理的探究力」は、学生自身が地理的事象や問題・課題を協働的に探究することがなければ、育成することはできないからである。

なお、地理学習に固有の「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）を、「学習者自身が主体的に発見あるいは選択した地域・日本・世界の社会の課題や問題を取り上げ、他者である意見や考えの異なるクラスの仲間と対話しながらそれらの原因や解決策を

深く考え、より良い未来社会の実現を目指して行われる学習」と定義しておきたい⁵⁾。このような学びを引き出すような授業を開発していくことが、これからの地理授業には求められているのではなかろうか。

4. 「地理的探究力」を育成する地理授業デザイン

(1) 単元の教材構成

前述した地理授業改革の3つの視点に基づいて、授業科目「地誌」の単元レベルの授業デザインを考えていきたい。最初は、教材構成である。具体的には、どのような学習内容を、どのような学習材を通して学ばせるのかという問題である。

単元レベルの学習内容の抽出に当たっては、表1のような到達目標の構造を前提に学習内容を選択していくことが必要となろう。表1からも読み取れるように、1単元の中で「アクティブ・ラーニング」型の学習においては、「どのように、どのような」「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」を学生自身が発見し、それを協働的・対話的に追究していくような授業デザインが求められる。

表1 単元レベルの到達目標の構造化

内容的目標 方法的目標			事象や課題	知る	わかる	生きる・つくる
			情報	知識	理解	学びに向かう力
学 び に 向 か う 力	技能	表 現 力	→ 「どのように、どのような」			
	思考力		→ 「なぜ、どうして」			
	判断力		→ 「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」			

(筆者作成)

また、授業の中で学生が主体的に思考・判断するための問い（「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」）が生まれるような学習材として、地域密着型の地域教材となりうる新聞記事で取り上げられた事例を活用することが有効であろう。具体的には、「アクティブ・ラーニング」型授業を成立させる学習材としては、次の3つのものが有効であると考えられる。

- ① 社会的変化型…社会の変化に伴う地域・社会・世界や時代の課題（願い）を解決（実現）していった（しようとしている）人間の問題解決の知恵
- ② 社会的課題型…グローバル化・多文化化への対応，ESD（持続可能な社会の形成），防災・安全（公助・共助・自助），主権者育成，地域創生（里山・里海再生）などの今日的な課題
- ③ 論争問題型…価値観や世界観の違いによって判断の分かれる社会的論争問題や歴史的論争問題

(2) 単元の学習過程の組織

単元レベルの授業デザインにおいて次に課題となるのは，新聞記事を取り上げながら，どのような学習過程を通して地理的に探究するのかという，学習過程の組織である。

1 単元の学習がアクティブなものとなるためには，表2のような単元レベルの協働的な学習過程の組織が必要になると考えられる。

表2 単元の学習過程のモデル

<p>導入部 (発見)</p>	<p>①学習問題の発見の過程である単元の導入部では，新聞に親しませるための活動や学習意欲を喚起するような新聞記事の紹介などを通して，学生が学習問題を自分自身の問題として発見していくことができるようになるための学習材との出会わせ方を工夫することが必要である。</p> <p>②また，どうしたら学習問題を解決することができるのかを考える，学習方法の話し合いや学習計画の立案を行うことが必要である。</p>
<p>展開部 (探究)</p>	<p>③学習問題の探究の過程である展開部では，新聞記事に取り上げられている事象や課題を「知る」ための新聞記事の記述（どのように，どのような）とそのまとめ・発表を行う。</p> <p>④次に，「わかる」ために，事象や課題に対して「なぜ，どうして」と問い，その背景の追究（解釈や説明）を行う。</p> <p>⑤また，なぜこのような記事を掲載したのか，新聞社の価値判断の背景を追究する。</p> <p>⑥事象や課題の背景と新聞社の価値判断の背景を考えるために，それを取材した新聞記者の出前授業を行う。</p> <p>⑦そして，より良い社会をつくるためには「どうしたらよいか，どの解決策がより望ましいのか」と問い，クラスの仲間との意見交流を通して自分自身の意見や考えをまとめる。</p>

終結部 (表現)	⑧学習成果の総合的表現の過程である終結部では、学習のまとめとして、自分自身の追究内容や意見・考えを新聞の形式で表現する。 ⑨教室の中でそれらを交流し、自己評価・相互評価の活動を行う。 ⑩更なる追究のためのパフォーマンス課題を発見する。
-------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(筆者作成)

5 大学における地理授業改革の試み

～科目「地誌」における単元「びんご多国籍時代」の場合～

(1) 取り上げた連載記事「びんご多国籍時代」

「地誌」の単元「びんご多国籍時代」において取り上げた中国新聞の連載記事は、表3の通りである。

表3 中国新聞連載「びんご多国籍時代」の記事一覧

<p>第1部 変化の波</p> <p>① ベトナム人急増 日本ブーム 人気の福山へ 駅前に料理店続々活気も</p> <p>② 留学生アルバイト 夜勤明け登校くたくた 人不足 工場は「頼みの綱」</p> <p>③ 新たな実習生 獲得激化 変わる出身地 中国減少 東南アジア増加</p> <p>④ 日本語教室 受講者増 文化・生活学ぶ 講師不足や空き待ち状態</p> <p>⑤ 日系人減少 小用の好条件求め転出 低賃金 働く場の魅力低下</p> <p>⑥ 芽生える交流 実習生 地域行事に一役 受け入れる側の認識が鍵</p> <p>第2部 実習の島</p> <p>① 実態 制度改正 働く環境改善 待遇への不満 失踪要因に</p> <p>② 下請け 従業員 過半数がタイ人 減る日本人 求人反応鈍く</p> <p>③ 暮らし 来日のため100万円借金 高金利 生活切り詰め返済</p> <p>④ 技能習得 労働実態 計画と隔たり 専門技術者雇用の動きも</p> <p>⑤ 地域との関わり 行事で交流 活気呼ぶ ごみ分別 教える仕組みも</p> <p>第3部 暮らし</p> <p>① 就労 日本語できず狭き門 教室は不十分 時間もなく</p> <p>② 中国帰国者 少ない年金 介護も不安 2世の多く 施設対象外</p> <p>③ 教育 増える子ども 対応急務 母国語多様化 指導難しく</p> <p>④ 留学生の就労 人口減 地方企業は歓迎 受け入れ態勢整備課題</p> <p>⑤ 女性 生活・育児 同郷支え合い 国超えた交流 望む声も</p> <p>第4部 活躍の場</p>

- ① 介護 フィリピン女性 温か 気遣い 笑顔 利用者に好評
- ② 正社員 出身問わず人材採用 背景に少子化 競争激化
- ③ 専門職 海外事業の担い手育成 高度人材 大都市に偏りも
- ④ 農業 担い手減り 実習生頼み 外国人客誘致にも活躍期待
- ⑤ 地域活動 母国紹介 地元に元気 ラジオ・消防団…偏見超え

第5部 支援の輪

- ① 外国人同士 先輩 言葉と心をケア 仕事・子育て・人生相談
- ② 留学生 頼れる大家 生活に添う 日本語学校 マナー指導
- ③ 言語 暮らしを支える通訳不足 報酬や人材育成に課題
- ④ 交流 地域行事で仲間広げる 国超えた助け合い目指す
- ⑤ 日本語教室 国籍・世代超え友情育む 日本人には国際交流の場

第6部 とともに暮らす社会へ

- ① 外国人技能実習制度 定住できる仕組みを 実態に即した議論必要
- ② 留学生 学校点検の機関必要 地元定着 産学官連携を
- ③ 暮らし 行政情報は多言語に 孤立防ぐ居場所も必要
- ④ 人材受け入れ 「地域で迎え入れ」必要 単純労働者増える実態
- ⑤ 地域社会 思い・事情 心を寄せて 市民として助け合いを

(2) 単元「びんご多国籍時代」の授業計画

1) 単元目標

- ① 新聞の連載記事「びんご多国籍時代」を通して、新聞記事がそれをどのように伝えようとしたのかを抽出することができる。
- ② 備後地域で近年、なぜ外国人労働者が多くなってきたのか、その要因や背景について、新聞記事や記者の出前授業の内容から考えることができる。
- ③ 新聞社は、なぜ「びんご多国籍時代」を1～6部までの長期の連載記事として伝えようとしたのか、その価値判断の背景を読み解くことができる。
- ④ 「びんご多国籍時代」を通して、急速に進展する内なる国際化とそれに伴う多文化共生に向けての課題についてどう考えていけばよいか、個人で判断（意思決定）を行い、自分なりの意見や考えをもつことができる。
- ⑤ 多文化共生社会の実現に向けて、大学生としての自分たちにできることは何か、教室での仲間や専門家（新聞記者）との協働的・対話的な議論を通して、自分自身の意見や考えを深めることができる。
- ⑥ 多文化共生に向けての自分自身の意見や考えを、「はがき新聞」づくりを通して発信（表現）することができる。

2) 単元の展開計画 (全4コマ)

コマ	テーマ	主要な問いと活動
1	<p>導入：教材との出会いと学習問題の発見</p> <p>○連載「びんご多国籍時代」の第1部「変化の波」の紹介</p>	<p>○2017年1月25日から始まった中国新聞備後地域面の連載「びんご多国籍時代」の第1部「変化の波」(①～⑤)を読み、多国籍時代とはどういう意味か、どのような変化の波が備後地域におきているのかを考える。</p> <p>○身近な日常生活の中で、どのような時に多国籍時代と感ずるか、話し合う。</p> <p>◎学習問題の発見 「備後地域で急速な多国籍化がなぜ生まれているのか?」「この課題を解決するにはどうすればよいか?」</p>
2	<p>展開1：「びんご多国籍時代」の課題とは</p> <p>展開2：連載「びんご多国籍時代」の読み解き</p> <p>○連載第4部「活躍の場」の読み解き</p> <p>○連載第5部「支援の輪」の読み解き</p> <p>○連載第6部「ともに暮らす社会へ」の読み解き</p>	<p>○「多国籍時代」と呼称される「内なる国際化」の中で、どのような課題が生まれているのか、連載「びんご多国籍時代」の第2部「実習の島」と第3部「暮らし」から見つける。</p> <p>○5名で、グループをつくろう。</p> <p>○連載「びんご多国籍時代」の第4部「活躍の場」(①～⑤)、第5部「支援の輪」(①～⑤)、第6部「ともに暮らす社会へ」(①～⑤)を分担して読んでみよう。</p> <p>○読み取った記事内容を、グループ内の他のメンバーに紹介しよう。</p> <p>○備後地域でなぜ外国人労働者が急速の増加してきたのか、どのような支援が求められてきているのか、その要因や背景について考えよう。</p> <p>○多文化共生社会の実現に向けてどのような取り組みが求められているのか、意見や考えを持とう。</p>

	<p>展開3：新聞社の価値判断の読み解き</p>	<p>○中国新聞備後本社は、なぜ「びんご多国籍時代」を本年度の第1部～第6部までの長期の連載記事として伝えようとしたのか、新聞社の意図についても考えてみよう。</p> <p>○次回の新聞記者の出前授業の際に聞いてみたい質問を考えておこう。</p>
<p>3</p>	<p>展開4：「びんご多国籍時代を取材して」の出前授業 (高本友子記者)</p>	<p>○中国新聞備後本社の高本友子記者による出前授業⁶⁾</p> <p>「びんご多国籍時代を取材して～備後地域に見る多文化共生」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取材開始のきっかけ ・外国人の在留資格 ・いま、福山市に外国人はどれくらいいるのか ・技能実習大国「広島県」 ・留学生都市「福山」 ・福山市の外国人①ベトナム人増加 ・福山市の外国人②新たな実習生 ・福山市の外国人③日系人の減少 ・福山市の外国人④正社員、専門職 ・福山市の外国人⑤永住、定住者の生活 ・「移民」か「労働力」か① ・「移民」か「労働力」か② ・行政、国がすべきこと ・市民にできること <p>○質疑</p> <p>○ワークシート作業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日の出前授業で特に関心を持ったこと ・本日の出前授業に関連して、もっと学んでみたいテーマや内容

4	展開5：「びんご多国籍時代」への意見や考え	<p>○「びんご多国籍時代」と呼ばれる地域社会において、多文化共生の社会を実現するためにはどうすればよいか、個人で考えてみよう。</p> <p>○その意見や考えを、クラス全体で交流しよう。</p> <p>○多文化共生の社会を実現するために、備後地域の大学に学ぶ学生として自分たちにできることは何か、教室の仲間の意見や新聞記者の出前授業の内容も参考にしながら考えてみよう。</p>
	終 結：「はがき新聞」の作成と交流	<p>○多文化共生に向けての自分自身の意見や考えを、「はがき新聞」にまとめてみよう。</p> <p>○作成した「はがき新聞」を教室に掲示し、交流しよう。</p>

6 おわりに～研究の成果と今後の課題

以上考察してきた本研究の成果としては、次の3点を指摘することができる。第1は、学習指導要領の改訂に伴う大学における地理教育の課題として、「地理的探究力」の育成を目指した授業改革という課題を抽出できたことである。第2は、「地理的探究力」の育成を目指した授業改革の視点として、目標としての「地理的探究力」の育成、学習内容としての近未来の社会的課題、学習方法としてのアクティブ・ラーニングという3つの視点を提案することができたことである。そして第3は、3つの視点に基づいて授業科目「地誌」におけるアクティブ・ラーニング型の単元「びんご多国籍時代」の授業計画を作成・実践・修正することができたことである。

今後の課題としては、次の2点を指摘することができる。第1は、開発した単元の背後にある授業デザインに関する理論仮説の有効性を、他の単元を作成・実践・評価することを通して、吟味・修正していくことである。本研究では、「はがき新聞づくり」という表現活動の分析にとどまっている。第2は、授業科目「地誌」の4コマ分の単元の授業開発にとどまっており、カリキュラム全体の改革にはいたっていない。これらについては、今後の課題としたい。

【註】

- 1) 単元「瀬戸内再生」については、拙稿「大学地理教育におけるNIE授業の開発（1）～単元「瀬戸内再生」の場合～」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第4号、

2017 で発表している。

- 2) 授業科目「地誌」の全体は、前半では世界の地域区分に基づいて世界の諸地域の静態的・動態的な地誌の内容を解説する、後半では日本の諸地域の区分に基づいて受講生が調査・発表する内容構成となっている。本研究における「びんご多国籍時代」は、前半と後半のつなぎの4コマ分を用いて、身近な地域である備後地域の地誌を探究する単元として構成したものである。
- 3) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」2016年8月26日, pp. 144 - 145。
- 4) 「地理的な見方・考え方」については、文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』教育出版, 2010, p.99, が詳しい。具体的な問いは、次の5項目である。「①どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか」「②そうした地理的事象がなぜそこでそのようにみられるのか、また、なぜそのように分布したり移り変わったりするのか」「③そうした地理的事象は、そこでしかみられないのか、他の地域にもみられるのか」「④そうした地理的事象がみられるところは、どのようなより大きな地域に属し含まれているのか、逆にどのようなより小さな地域から構成されているのか」「⑤そのような地理的事象はその地域でいつごろからみられたのか、これから先もみられるのか」。
- 5) 小原友行編『アクティブ・ラーニングを位置づけた中学校社会科の授業プラン』明治図書, 2016, 参照。
- 6) 中国新聞備後本社の高本友子記者による出前授業は、11月27日(月)の3コマ目に行った。大学生にとって興味・関心を喚起する授業であったことが、授業中のアンケート調査(出前授業で特に関心を持ったこと、もっと学んでみたいテーマや内容を自由記述させた)の結果明らかとなった。

【付記】

本研究は、平成29年度福山大学教育振興助成金を受けて行った研究成果の一部である。

A Study on the New Viewpoints to Develop the Lesson Plan in University Geography Education for “The Ability of Geographical Inquiry”: The Case of Unit of “The Multinational Age in Bingo Area”

Tomoyuki KOBARA

The aim of this paper is to discover the new viewpoints to develop the lesson plan by active-learning in university geography education for “the ability of geographical inquiry”. The results of this study paper are as follows;

- (1) The problem to reform the university geography education is to develop the lesson plan for “the ability of geographical inquiry”.
- (2) The new viewpoints to develop the active / learning type lesson plan are following three;
 - 1) to put “the ability of geographical inquiry” as the learning objective into the geography lesson.
 - 2) to take in the social problems of near future as the instructional materials for the geography lesson.
 - 3) to take in the active-learning by NIE (newspaper in education) as the learning activities for the geography lesson.
- (3) The unit of “The Multinational Age in Bingo Area” is developed using the running story in *Chugoku Shimbun* as a lesson model based on the new viewpoints.

【Keywords: topography, geographical inquiry, NIE (newspaper in education), active-learning, multicultural symbiosis】